

## 学位論文審査の結果の要旨

氏 名	龍崎 孝		
学 位 の 種 類	博士（学術）		
学 位 記 番 号	甲 第 1428 号	※論文博士は乙	
学位授与の日付	平成 28 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	文部科学省令学位規則 第 4 条第 1 項 該当 ※論文博士は第 4 条第 2 項		
学 位 論 文 題 目	三陸をめぐる表象と空間編成：その歴史性と権力		
主 指 導 教 員	松本 郁代		
論文審査委員			
	（主査）山田 俊治	教授	
	（副査）小野寺 淳	教授	
	（副査）柿崎 一郎	教授	
	（副査）乙坂 智子	准教授	
	（副査）松本 郁代	准教授	
	（副査）川嶋 將生	立命館大学 名誉教授	

### 論文内容の要旨

本論文は、2011年3月の東日本大震災によって甚大な被害を受けた三陸の空間が、メディアや政治によって重層的に表象されてきた実態と意図を明らかにし、現在進行する復興政策によって三陸がいかなる空間編成になりつつあるのか、三陸の場所性を通じて考察したものである。本論文の構成は、第1部「三陸における海と陸の空間認識」、第2部「三陸大津波と公権力、マス・メディア—『大海嘯被害録』「三陸彷徨」における表象を通じて」、第3部「公権力による空間の統一—東日本大震災と場所をめぐる問題」の全3部、各部3章立てに序章と終章を加えた9章からなる。

現在、海を資本として捉えるグローバリズムが震災の復興政策と共鳴し、三陸の海には、外部資本が運営する新たな場所が作られつつある。しかし歴史的にみれば、地震の度に津波が常襲した地であっても、三陸の人々は津波を生活の中にとりいれ、海を生業の場として暮らし続けてきた。このようにして歴史的に培われた三陸の特色ある場所性が、外部資本の流入によって没場所性となっていく三陸の空間構造を明確にし、東日本大震災の復興にみる三陸の空間編成について分析した。

第1部では、三陸の場所が人々の海との関わりによって形成された場所性をもつとともに、三陸が権力によって表象されてきた場所である点を歴史資料を用いながら明らかにした。なかでも、三陸が歴史的に「辺境」と認識されてきた理由は、権力から

の地理的距離に根ざすのではなく、古代では朝廷に従わない「蝦夷」が暮らす土地として、近代では戊辰戦争において天皇に敵対した奥羽越列藩同盟が統治した地域とする古記録や記述の在り方から、中央や権力側からみた「辺境」の表象には支配権力に服従しなかった場所の意味が裏打ちされている点を指摘した。さらに、陸からの交通が閉鎖され東北の中でも孤立した場所に位置した三陸であるが、海を通じた三陸の場所性として、三陸出自の漂流民による偶発的な海域体験や三陸の海域が幕末期の海防拠点となった実態、また三陸沿岸部の水主らの浜を通じた連携による一揆の組織形態の分析を通じて、三陸の地理的環境が海に開かれた場所性をもつ点を論証した。またこれらの分析により、三陸の公権力によって表象された場所性と、歴史的に培われてきた場所性とを対照化した。

第2部では、三陸の場所性と表象の問題について、マス・メディアによって津波がどのように三陸の場所を表象してきたのか、明治29年の三陸津波を報道したグラフ誌『大海嘯被害録』と、第二次世界大戦後に広まったテレビによる東日本大震災の報道を通じて考察を進めた。マス・メディアが三陸の津波を報道し記録する目的は「伝えること」であるが、マス・メディアが伝える三陸の惨状はそのまま人々の中で三陸の表象となる。被害を受けない人々にとって三陸が「被災地」であり、津波が三陸にとって「災い」であるという認識を生産した。かかる形式を有すマス・メディアは、近代以降、「被災地」を救済する権力の維持や正当化、共鳴の装置として用いられ、また自らもそれに共振することで機能した点を論証した。そして、震災報道におけるマス・メディアの形式と権力による三陸の表象とが共振関係にある点を指摘し、マス・メディアを通じて認識される三陸の場所性は、被災地化されたものであることを抉出した。

第3部では、歴史的に培われてきた三陸の場所性や、三陸が被災地化されることで空間編成を行う権力構造やメディア形式を踏まえ、現在進行する東日本大震災の復興政策のうち、特に漁業権に関わる宮城県の水産業復興特区の意図について検討した。特区政策は、津波によって破壊された漁業集落の再建や存続、従事者の高齢化や過疎化など漁業の衰退を構造的に克服する試みであり、必然的にグローバルな資本主義下に三陸の海が相対化され、効率性や競争が求められる漁業社会の導入が想定される。震災を契機とする三陸沿岸における漁業の復興政策には、復興とグローバリズムの流れに、三陸の海を資本とする水産業の構造改革が意図されており、三陸の場所性が次第に中央の空間によって包摂され、三陸の新たな場所性が重層的な空間のなかで編成されていく政策である点を論証した。

津波によって場所の破壊と再生が歴史的に繰り返される中で、人々が三陸に暮らし続ける理由も三陸を離れる理由も、海との関連性が根底にはある。しかし、その海と人々を切り離し、三陸の歴史や地理が育んだ場所性を度外視し、空間として画一的な資本の対象とすることは、グローバリズム下における市場としての新たな場所性を作り出すが、しかしそれは三陸に暮らし続けてきた人々の内発的な場所性を取り戻すことにはならない点を提示した。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、地理学者エドワード・レルフやデービッド・ハーヴェイらによる欧米の場所理論を用いながら、震災復興を契機とする三陸の場所性を歴史や権力による空間編成の観点から論じたもので、東日本大震災から5年が経過しようとしている時点における震災復興政策の現状を踏まえながら、被害地となった三陸の場所性を多様な資料を博捜しながら導き出し、現在進行中の復興政策に対する新たな三陸論としての議論を打ち立てた。震災復興とグローバル化を背景とする壮大なスケールの中に三陸の海を通じた三陸の場所性を捉え、三陸の未来を見据えた画期的な論として評価できる。

論文は3部構成各3章立てに序章と終章あわせて全11章からなり、論文の本文編が全202頁、資料編全78頁からなる。第1部から第3部に収められた各論がそれぞれ学術論文として通用するレベルであり、全体の論旨が序章と終章のなかで的確にまとめられており、優れた論述による論文構成となっている。

博士論文の下地となる刊行論文として、単著が2本、書き直し中で掲載予定の論文が1本のほか、共著による資料紹介が3本、その他ジャーナリストとして執筆した文章が多数発表されている。そして、東日本大震災直後の2011年5月から約1年間三陸に住み震災関連の取材と報道を主導した経験は、現地調査としての経験にもなり、三陸滞在中の2011年9月号から現在まで連載を継続する「三陸彷徨」(『調査情報』TBSメディア総合研究所行)を踏まえた在京キー局所属のジャーナリストとして三陸を捉えてきた論も、本論文の中では三陸の場所性に相対化され分析が試みられている。

さらに本論文では、グローバル化や市場経済によって空間が資本に変容する欧米の場所をモデルとした経済的な空間原理に対し、地震や津波など強大な自然現象による空間の変更や消滅のモデルを新たに提示し、三陸のような複雑な地形をもち地震が多発する日本の地理空間に適した場所論を展開し、欧米のモデルが主導的な場所論研究に一石を投じている。

日本―東北―三陸という重層的に形成された空間認識の根拠となる古記録の主体者やマス・メディアによる表象の意図や権力構造を読み解くことにより、権力とメディアの共振性を鋭く描き出し、これらが日本―東北―三陸を重層的に表象してきた歴史性を剔抉したといえる。メディアによる表象が空間認識を変える視点を新たに提示し、それが政策面に影響している現状を突いているなど、本論文は空間における場所の変化が地域や社会に変容をもたらせる場所論分析として学術的に秀でた論として評価することができる。

本論文の特筆すべき点は、三陸の場所性を、海を生業とし浜を単位とする集落が歴史的に形成されてきた点に求め、「辺境」としての三陸像は権力による表象によるものであるとして覆し、さらに、水産業復興特区構想における三陸の空間編成の在り方

は、三陸の本来的な場所性を破壊し没場所性を生産する点を指摘し、現実的な復興政策に対する懐疑につなげた政策論である点である。復興政策を三陸の場所性という空間論を切り口に論じた斬新性は秀逸である。

また論全体を裏付けるための資料精査、資料読解に際しての洞察力、先行研究や現地での取材成果を踏まえた目配りの効いた議論が展開されている点は、研究者としての資質を備えている証左でもある。

今後の論の課題としては、更に空間が統合化、階層化が進むグローバル化に対応するための仕組みをどのように検討してゆくか、また三陸現地における民俗調査を深めることにより、三陸の人々による内発的な場所性を明確化するための材料を収集しながら、三陸における空間構造の分化を重層的に捉えた研究の展開が期待される。

以上、審査員による評価を総合的に勘案した結果、学位基準を十分に達していると判断できることを確認し、全員一致で合格とした。